タンタラスの虹

渡辺喜恵子

夕　　虹

渡辺喜恵子

タンタラスの虹（にじ）

一九七五年五月二〇日　印刷
一九七五年五月二五日　発行

定　価／八五〇円
著　者／渡辺喜恵子（わたなべきえこ）
発行者／佐藤亮一
印刷所／二光印刷株式会社
製本所／大口製本株式会社
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二二六六-五一一一
　　編集部(03)二二六六-五四一一
郵便番号　一六二
振替　東京四—八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kieko Watanabe, 1975 Printed in Japan

タンタラスの虹■目次

ホノルル 5
風の視線 30
昏い海 48
無慈悲な太陽 80
沖のひとつ星 93
ハイビスカスの咲く庭 112
雪の降る町 130
鉄格子の中から 137
虹の懸け橋 164
娘たち 200
白い秋 216
別離 244

装幀　野中ユリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

タンタラスの虹

ホノルル

ハワイ語でホノルルとは「晴れた天(そら)」である。

遠い氷河時代に、ハワイの島々は海底火山の噴火によって次々に浮き上ったといわれているが、ある地質学者は、浮び上ったのではなく、ある古い時期に海水が減退し、海中に没していた陸地が海上に姿を現わしたのだといっているそうだ。

いずれにしてもハワイ群島の誕生は第三紀層時代の中頃ということになるだろう。その頃は、現在のハワイ八島のうち、モロカイ、ラナイ、マウイ、カホオラウエの四島は一つの大きな陸地であったが、極地の雪解けによって再び二千五百フィートも海水が増したので、山の頂きだけが海上に残り、現在のかたちでそれぞれ独立した島になったのだという説もあって、最初の土着人は南太平洋からやって来たポリネシア人である。彼等は星座にくわしく、風をたよりに航海をつづけた民族であった。潮の流れにのって、長い航海をつづけるうちに、ハワイという男が、ついにこの群島に辿りついたのだ。

彼等は行動をおこすとき、幾組かのグループを募って、大型の帆走船、双胴のカヌーに家畜や植物の苗まで積み込んで生れ故郷を出発する。潮の流れにのって、何千カイリも何万カイリも航

海をつづけるためである。波間に消えて行った幾組かのグループもあったのであろう。この世での別離を厭わねば、海底にも楽園はあると彼等は信じていた。

長い長い航海の果てに、ハワイと呼ぶその男の一団が、ついに八つの島を探し当てたのだ。

やがて鳥が、この島に植物の種を運び、人間はゆっくり、ゆっくりその数を殖やした。そして何者にも冒されることなく、太平洋の真っただ中に、彼等の楽園が築き上げられた。のちの人間がそれを原始社会と名づけ、ハワイの石器時代と呼んでいるが、彼等はそのとおり、文字さえ持たなかったのだ。文字によるハワイの歴史が、正確に始まったのは一七七〇年代で、英国人に発見されてからである。探検家キャプテン・ジェームス・クックが、世界旅行の途上でハワイ群島を発見し、さっそく彼のパトロンであるサンドウィッチ伯爵の名をとってサンドウィッチ群島と地図に書き加えた。しかし、楽園を発見した筈のクックは、二度目の来島で、ハワイ島のケアラケクアという海辺の部落で土着人に殺されている。一七七九年、二月十四日、ジェームス・クックはハワイで非業の死をとげた。年齢五十一歳と世界地図に書き込まれて、ハワイは俄かに注目を浴び出したのだ。一七七〇年代のハワイ群島は、すでに群雄割拠の戦国時代でもあったのだ。ハワイ島コハラに生れ、のちに大王と呼ばれたカメハメハが、酋長になったのは一七八二年で各地、各島々を武力で平定し、一七九五年に、最後の激戦がオアフ島のヌアヌ・パリで終った。マウイ島のラハイナを首都として二十四年間、カメハメハは大王の名に恥じぬ善政を行なっている。

一八〇〇年代に入るとハワイ群島にも文明開化の波が次第に打ち寄せて、土着人達を驚かす事件が次々に起った。白人が頻繁に島を訪れるようになり、外国との交易が始まったからである。カメハメハ二世の一八二〇年には、ニューイングランドからプロテスタントの宣教師団がやって来た。

彼等は裸の土着人にキリスト教を広め、着物を着ることを教えた。学校を建て、文字を教え、

印刷所も設けた。そして人間の生命というものは、どんなに大切であるかを説いたのだ。
カメハメハ三世は憲法を発布し、ハワイを立憲君主国とした。そして首都もマウイ島のラハイナから、オアフ島のホノルル、つまり土着人のいうところの「晴れた天」に移したのだ。
カメハメハ王家は五代で絶えている。その後は選挙制によって王位を定めたが、八代目の王位を継いだリリウォカラニ女王の時代に動乱と革命が起って、ハワイ王朝はついに滅亡した。ワイキキは晴れてもホノルルの山々に絶え間なく降る雨は、王政復古の希いもむなしくイオラニ宮殿に幽閉されたまま、ホノルルで淋しい最期を遂げた悲劇の女王リリウォカラニの涙だと、ハワイ人は言う。
オアフ島の面積は約六〇四平方マイルでハワイ群島の中ではハワイ、マウイにつづいて三番めに大きいが、西北から東南に走るコウラウ、ワイアナエの両山脈が貿易風を受け止めるので、谷が絶えず時雨れ、山々も煙ってみえるのだ。晴れた天のワイキキ海岸だけはいつも御機嫌で、リリウォカラニ女王の涙も時には大きな夢とふくらむ。七色の虹となって青い空を征服するのだ。空から海へ、そして女王がたてこもったというダイヤモンド・ヘッドへ、夢の懸け橋は思いのままに伸びてゆく。

その虹の下、見渡す限りタロ芋畑のつづくモイリリで美穂はやっと自分達母子が住むのにふさわしい家を見つけた。家賃は十一ドル、古びた小さな家だが、マンゴとライチーの大きな木のある庭が広く、何よりも十一ドルの家賃の安さが美穂の気に入ったのだ。
家主はシナ人であった。このモイリリ一帯にはシナ人と日本人が多く住んでおり、子供を置いて働きに出るのに、気を遣わずに済む点も安心だった。とかく日本人は群れたがると悪口を言われるが、なんと言われようと、同じ皮膚、同じ骨格の人間が周囲にいてくれるということは気強

い。住むところがきまると、美穂はすぐ仕事を探しに歩き廻った。夫を失い四人の子供を抱えているのだから一日も安閑と遊んでいるわけにはゆかなかった。

第一次世界大戦後の不況が長く尾を引いて、ホノルルの街も不景気だった。職を求めて必死に歩き廻ったが、子供を抱えている女に、おいそれと思わしい勤め口は見つからず、仕事を探しに歩くのが仕事になって、苛いらと幾日かが過ぎた。

恥も外聞もなく足を棒にして美穂はホノルル中を歩き廻った。結局は労働者になるしかないのだが、黍畑で一日働いても四十セントにしかならないと言われた。いまは人手があまっているからだ。十日働いて四ドル。一月を休みなく働いたとしても十二ドル。十一ドルの家賃を払って電気代を払えばそれでおしまいだ。

「夜間の勤めは駄目なのかね、その方が実入りがいいんだよ」

ダウン・タウン（下町）に小さな事務所を構えている口入れ屋の親爺は、眼鏡越しにじろじろと、上から下まで舐めるような眼つきで美穂を眺め、歯の隙間から空気でも吸うのか、ちっちっと舌を鳴らした。

「ハズベン（夫）はいるのかね」

亭主がいたらこんなところへ頼みに来るものか——込み上げてくる口惜しさを無理に押し隠して、美穂は弱々しく首を振った。

「この間のパイナップル工場に、まだあきがあるでしょうか」

「ああ、パイナップルはこれからがシーズンだから、臨時傭いでよければまだまだ人手は要るがね」

この男も移民くずれであろうか、ずり落ちる眼鏡をなんどもなおしながら、口入れ屋は美穂の名をカードに書き込んでくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「あんたは器量がいいから、パイナップル工場でパイナップルの選別なんかやっているのは惜しいよ。あれは手が荒れるからね。一時間たったの十五セントだよ。朝七時に就業して八時間働いても一ドル二十セントだ。どうだね、もう一度考えなおしてみないかね」
「ええ、でも月二十ドルあればなんとか暮してゆけますから」
二十ドルで母子五人の生活は難しいが、食べずにいても、口入れ屋の言うリバー街で働くよりはましだと美穂は思うのだ。
「ま、気が変ったらまたお出でなさい。いつでもいいところを探して上げるよ。わし等は日本人じゃけ、お互いに助け合おうじゃないか」
「有難うございます」
その言葉どおりならうれしいけど——油断なく頭を下げるしかない。逆らってみたところでどうなるものでもなかった。
就職口がきまると美穂は弁当を持って朝早く家を出た。パイナップル工場では何百人もの若い娘達が潑剌と働いていた。家庭持ちの女もいるのかもしれない。美穂達のような臨時雇いは年齢もまちまちで馴れないせいか、態度もおどおどしていた。
マシン（機械）にかけられ、皮をむかれたパイナップルを、さらに手でむいて等級を決めなければならない。マシン相手の仕事は一刻も油断が出来なかった。たちこめるパイナップルの甘酸っぱい芳香で忽ち酔っぱらったように眼が赤くなる。立っているのが辛いほど、黄色いパイナップルで眼が眩んだ。
「何をやっているんだ」
ルナ（監督）の声が笞のように頭上へ飛んでくる。呶鳴られて呶鳴られて、選別の腕が上ってゆくのだろう。白い布で髪をつつんだ娘達は鼻唄まじりでもマシンについてゆける。

美穂は毎日へとへとに疲れて家へ帰った。腹をすかせて待っている子供達がいなかったら、とても心も体も保つまいと思うほど、疲れ切った毎日であった。ときには、ホノルルへ出て来たのは間違いであったろうかと、思い惑う日もあった。

「ただいま」

「お帰り、お母さん」

九歳になった長女の初穂が幼い弟妹の面倒を見てくれた。美穂が戻って来るまでに米も磨いでおいてくれるし、洗濯物の取り入れから、買物までやっておいてくれた。小さな主婦のようによく気のつく娘だった。初穂の助けがなかったら、美穂はとても外へ出て働く気にはなれなかったであろう。

「今日は、変ったことがありませんでしたか」

「ええ、お手紙が届いてます」

初穂は亡くなった夫にそっくりだった。笑う口許(くちもと)、眼の涼しさ、手の指も足のかたちも死んだ野中菊治にそっくりであった。妹の奈穂も真理も、たったひとりの男の子の菊夫でさえ、それほど菊治に似ているとは思えない。むしろ母親の美穂に似ているのに初穂だけはちがっていた。父に似て頭もよさそうだ。素直な性質は生れつきらしい。父に似て誠実な人間になるのだろう。

「ニノレの角田さんとこのおばさんからよ」

角田玉枝は何を言ってよこしたのだろう。

「お母さん読まないの」

「あとで」

「きっといいことが書いてあるわ」

「いいことなんか書いてあるもんですか」
「どうしてわかるの、お母さん」
「ただそんな気がしただけよ」
　御飯と味噌汁と野菜揉みだけの食事が幾日もつづいている。せめて一切の魚、一片の肉でも添えてやらねば発育盛りの子供達には可哀想だと思うが、辛抱させるより仕方がなかった。子供達も、母の手に金の入ったときだけ魚や肉がたべられるのだと少しずつわかりかけて来たようだ。
「お母さん、今日大家さんがライチーを取りに来たよ。家は貸したけど、ライチーとマンゴは貸したんじゃないって」
「そう、吝なシナ人だね。家賃を取っていながら、家賃の中には土地代の使用料も入っているんでしょ」
　初穂は困ったように母の顔を見ている。
「明日、マンゴをとってよ。もう赤くなっているわ」
「まだ駄目よ。あのマンゴはヘーデンといって、遅い種類なのよ。紅がさしてから熟すまでに暫くかかるの。その代りとても味がいいからお母さんもたのしみにしていたんだけど、この分ではお母さんの留守の間に、また大家に奪られてしまうでしょうね」
　未熟のマンゴは毒だと、初穂に念を押して、美穂は食卓の後片づけに取りかかった。
　ライチーは中国系の移民達が自分の生れた国から苗木を持って来て植えたのだという。ライチーの木の植わっている家はたいがいシナ人の家だと菊治が教えてくれた。固い皮をむくと甘酸っぱい白い果肉のぷりぷりするライチーを菊治はことのほか好んだ。ライチーの熟れる頃は仕事の帰りに必らずどこかで手に入れ、食事の前もかまわずむさぼり食い、美穂にも食え食えという人だった。

赤子の手足を齧るようで美穂は舌に残るこの感触があまり好きでない。シナ人の大家が取っていっても惜しいとは思わないのだが、せっかくの子供達のたのしみを奪われたのが口惜しかった。後家だと思って、馬鹿にしているのだと思うとなおさらに口惜しく、薄情なシナ人の仕打かと思うと、癪にさわってたまらない。

美穂は子供達を寝かせてから玉枝の手紙をひらいた。

——野中さんのおくさん、お助け下さい。もう私はここにいることは出来ません。なんとしてでも角田と別れたいのです。二人の子供をジフテリヤで死なせたときから私は夫と別れる決心でした。いいえ、もっと前からです。おじいちゃんが死んで、野中さんが亡くなったときから、私達夫婦の仲は、いいえもうずっと以前から駄目になっていたのです。

沼へ行って死んだおじいちゃんは決して溺れて死んだのではありません。牧場の牛を沼へ追い込んで殺したのは主人です。主人の仲間達です。主人は悪人の頭でした。殺した牛の肉を売りに歩いていたおじいちゃんはハオレ（白人）に眼をつけられていたのです。おじいちゃんは牧場のハオレに狙われていたのです。撃ち殺されて沼へ逆さに放り込まれたのです。みんな息子の悪業のせいですが、それでもあの息子は悪業を改めないから野中さんに注意されたのです。主人は尻っぽを摑まれたので野中さんを快く思っていませんでした。野中さんから仕事を分けて貰っているくせに、角田はそういうずる賢い男です。自分の子供がジフテリヤにかかってどんなにもがき苦しもうと平気でした。ただ自分に伝染することだけを怖れ、酒をのんで、少しも看病してくれませんでしたよ。子供達は死んでしまい、これから先、私はどうして主人と一緒に暮せましょう。子供達の生きている間は、子供のためにこんな男でも子供達にとってはかけがえのない父親だと思ったればこそ、我慢しました。けれども、もう我慢が出来ません。私はホノルルへ出て働きたいのです。夫の許を飛び出して一日も早く自由の身になりたいのです。実家の母へ相談にゆきま

した。けれども実家の母は取りあってくれません。私は十五歳で角田と結婚いたしました。その時母が私に言いました。

「一旦嫁したからには、死んで帰るとも、生きて帰るなよ」と。

おくさん、結婚とはそういうものでしょうか。十五歳の私はなんにも知らず黙って頷きました。そのことを母が言うのです。

「長女のお前が出戻りなどしたら、お前の妹達も真似してみな家へ戻るようになる」と。私の実家は貧乏なのです。だから母は十五歳になったばかりの私を角田へやってしまったのです。その頃角田は巡査でしたから、親は威張っている角田を偉い人だと思ったのです。角田のお父さんは御存じのおじいちゃんで熊本県の人間ですが、角田のお母さんという人はハオレと土人の合の子で、おじいちゃんと一緒になって子供が二人出来たそうですが、一人を連れて出てしまいましたそうです。それで角田はぐれてしまったのかもしれません。

私は実家の母と喧嘩をしました。口先ばかり達者で、威張って酒のみで、あっちこっちへ子供を落して歩くような男のどこがよくて娘をやる気になったんだって。私がくってかかりましたら、お父ちゃんを見てみぃ、女を拵えたりはせんが、それで品行がいいと思ったら大間違いよ。人前へ出てよう口も利けんような男と夫婦になったらどうなる。一生、土に這いつくばっているばかりだ。それでもお前はいいと思うのかって、私は口惜しくておいおい泣きました。巡査を止めてしまったあの人が悪いのです。砂糖黍の大暴落以来、ニノレの耕地は死んでしまいました。再び立上る日が来るのでしょうか。夫の仲間は酒をのんではよからぬことばかり相談しております。泣き泣き夫の許へ帰りましたものの、私は風の音にもおびえます。どうかお助け下さい。五十ドル恵んで下さい。いいえお貸し下さい。ホノルルへ出て働いて必ずお返しいたします。お助け下さい。逃げてもヒロでは、夫に摑まってしまいます。お願いいたします——

五十ドルという金は、美穂の身にとって大金なのだ。菊治の残してくれた金はもう二百五十ドルだけになってしまった。コナにいる叔父松永信夫がホノルルへ出る美穂に餞別だと百ドルくれた。困ったらいつでも言ってよこせと言ってくれたが、叔父だとて金のなる木を持っているわけではないのだ。困ったからといってめったなことで迷惑をかけるわけにはゆかない。

こんなとき、夫ならどうするだろう。菊治なら——本当に玉枝の夫が菊治を殺したのだろうか、そんなことはない。玉枝の妄想なのだ。たとえ、角田治助の伜が投げ捨てた斧が菊治の脚に当ったのが本当だとしても、それは許し難い行為には違いないが、いや菊治がそのために逃げ遅れ、伐採した木の下敷になって死んだというのが真実なら、私は許せない。

菊治が見つけて来た山の仕事である。菊治の裁量で何人かの人間が仕事にありつき、玉枝の夫もその一人であったのだ。

野中さんおねがいしますとあれほど頼んで仕事仲間に入れて貰った角田が、どうして菊治を殺す気になるのだろう。確かにそれは、牧場の牛を沼へ追い込んだ事件で菊治は角田に注意した。角田の斧の柄が裂けていたということが事実であっても、それが証拠だときめていいのだろうか——それが真実なら何人かの人達が一緒に働いていたのだ。必ず目撃者がいる筈だった。

木が倒れかかって、逃げ出す瞬間に角田が斧を捨て、運悪く、菊治がその斧に躓つまずいた。そうだ。そうに違いない。あの冷静沈着な、身のこなしの敏捷な菊治が理由もなく、木の下敷になって死ぬなどということはあり得ないのだ。あり得ないことが起っているのだ。菊治の死因は内臓破裂だと医者が言ったそうだ。殆んど即死に近く、病院へ運ばれる途中で死んだらしい。酷ひどい死に方であったと想像はつくのだが、美穂は菊治の死体も死顔も見ていない。

あの朝、菊治はいつになく仕事に出るのを愚図ぐずり、美穂がせかすと二度も三度も寒いとぼやいた。二月のハワイは確かに暑いとはいえないが、寒いというほどの寒さではないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c